

竹北社長は、学校を卒業するとともに父親が営んでいた防寒用手袋の製造会社に就職する。長年、手袋の製造に力を注いできた父親だが、「暖冬が続き手袋が売れなくなり、このままではいずれ行き詰まってしまおう」と、ニット製品の生産にシフトし、子ども用のパンツ、タイツ、ベストなどの製造を始めた。

**父親が創業した  
防寒用手袋メーカーを  
3人の兄弟で引き継ぐ**

半導体製造装置用の断熱保温材や産業用耐突刺手袋などの縫製を手がける有限会社ポルテ（竹北孝文社長）は、生産の自動化に力を入れ、自動縫製システムを確立し、それを自社の強みとして、積極的にビジネスチャンスに挑戦し、業容の拡大を図っている。

# 縫製技術力を活かして ビジネスチャンスに挑戦

Case 2 有限会社ポルテ（香川県東かがわ市）

その後、竹北社長ら兄弟3人で父親の会社を引き継いでニット製品の製造を行い、パンツやベストなど婦人用のニット製品の製造を拡大した。

しかし、「韓国など海外からの低価格製品の輸入が急増するとともに、納期短縮や価格競争などの面で納入先の要求が厳しさを増し、このままでは経営が立ち行かなくなってしまう」と、竹北社長は判断し、兄弟で運営していた会社を辞め、新たなビジネスチャンスを探す道を選んだ。



自動プログラミングマシンを操作する竹北専務

# SHOKOKAI

地域を結ぶ総合情報誌 月刊 商工会

# 12

December 2017

特集

## ビジネスチャンスを見逃さない



わたしのふるさと  
フォークシンガー 南こうせつさん

地域を訪ねて  
鬼と大地が踊るおが!  
秋田県男鹿市



01/補助金などを活用した自動縫製システムを導入し、ビジネス拡大につなげている 02/素材を正確にカットできるレーザーカット裁断機 03/昨年3月に完成した本社・工場 04/現在、東かがわ市は、国内の手袋生産の90%のシェアを誇る日本一の手袋産地。その産地で事業を展開するポルテの竹北孝文社長（右）と、昌成専務



**需要拡大が期待できる  
半導体製造装置用断熱材の  
製造に賭ける**

新事業の機会を探っていた竹北社長に、高機能繊維を使った手袋を製造している親戚から、「作業用手袋の製造をやってみないか」と声がかかる。「これまでの縫製企画の技術を活かせる」と考え、平成元年に工場を立ち上げ、夫婦で安全保護具や消防関係の手袋の製造に着手した。しかし不運にも主力取引先が倒産。そこに、同社の縫製企画の技術を評価していた知り合いメーカーの社長から、「この部品の製造を手伝ってほしい」と、ひとつの製品を渡される。

**自動縫製システムの確立が  
ビジネスチャンスの  
獲得につながる**

竹北社長は、先行投資した自動プログラムミシンを活用することで、均一の商品を大量に製造することや細かい縫製が可能となり、顧客のさまざまな注文にも柔軟に対応できる体制を整えた。そして同社では、「手作業から機械化へ

それは半導体製造装置用の断熱保温材だった。「あらゆる製品のコンピュータ化が進むなか、半導体製造装置のニーズはますます高まっており、大きなビジネスチャンスにつながるに違いない」と直感した竹北社長は、このビジネスチャンスに賭けることを決意する。特殊素材の加工に悩まされたが、解決策として自動プログラムミシンを先行設備投資する。依頼された仕事のなかには細いヒーター線を手縫い加工するものがあつたが、「我が社の技術を活かせる」（竹北社長）と研究開発を重ねた結果、手縫いを自動化させることに成功。平成9年に法人化し、本格的な生産に乗り出す。その後、特許を取得した。

の推進」という考えのもと、新たな設備を次々導入。平成18年には、レーザーカット裁断機を導入した。そして平成24年度補正予算ものづくり補助金を活用し、自動プログラムミシンと大型レーザーカット裁断機を増設。この2種をパソコン上で融合させて製造する「ITソーイング」を確立し、素材の正確な裁断から縫製までを一貫して自動でできるシステムを確立させた。

昨年春には市内に新工場を建設し、大型NC自動裁断機を含めた最新設備を導入。「今年中には6軸産業用ロボットを導入、自社の強みである縫製の一貫自動化体制をさらに強固にしたい」と、竹北社長は他社にまねできないビジネスの一層の拡大を目指す。最新設備を先行投資することで「IoTなど今後も半導体関連の事は確実に増えていく。つかんだビジネスチャンスを実にものにした」と、後継者である竹北昌成専務はこれからの展望する。

**「現場の悩みを解決する  
縫製メーカー」として**

半導体製造装置用の断熱保温材

製造とは別事業として、高機能繊維を扱う同社は、「ゆずを収穫する際、とげが刺さって困っている」（JA）、「びんの破片や針などでケガをする作業員を守るための手袋をつくれぬか」（産業廃棄物収集業者）などのさまざまな相談が寄せられる。「これまで蓄積した高度な縫製技術を活かして、顧客の悩みも解決できるのではないか」。竹北社長は、確立している「ITソーイング」システムをもとに、妥協なきものづくりに取り組む。

なかでも立体手袋の自動縫製システムをさらに開発。このシステムにより製品化された耐突刺・耐切創作業手袋は、針やガラスのかけら、とげなどが刺さり困っていた作業現場で広く活用されている。また、糖尿病治療で使われている極細のインスリン注射針に対応できるステンレス内蔵耐針作業手袋「インスリンガード」や耐針指カパー「N-Cap」を新開発している。「針刺し事故」が多発している医療現場や医療産廃の回収現場での需要を見込んでいる。まさに、現場の悩みを自社の技術力で製品化して解決を図り、それを新たなビジネスチャンスにつなげている。

**自社の強みを磨いて  
ビジネスチャンスへ**

同社では、医療用や産業廃棄物用など特殊手袋の販路を拡大するため「海外への輸出も検討中」（竹北専務）だ。そのため、東かがわ市商工会の支援で持続化補助金を活用し、自社サイト（HP）をリニューアルした。新たなHPは、英語、韓国語、中国語、ドイツ語、フランス語に対応している。

自社の強みを磨いてきた同社は、「顧客現場の悩みを吸収した新しいものづくりを目指して、失敗してもあきらめず、妥協のない製品開発を継続してきたことがビジネスチャンスを生んできた」と思います。そして、ものづくり補助金などの補助事業をビジネスチャンスと捉え、チャレンジしてきたことや、最新設備の先行投資を行ってきたことこそが、今の事業拡大につながっているのかもしれない。竹北社長は、これまでを振り返りながらそう話した。



01/極細のインスリン注射針に対応できる手袋 02/特許取得の自動縫製でつくられた突刺防止手袋（同社HPより掲載） 03/ステンレス内蔵耐針指カパー

03

02

01